

佐賀県小城市 岩蔵寺 蔵 大般若経に書入れられた鎌倉時代の角筆文字等について

小林芳規

目次

- 一、岩蔵寺蔵大般若経の内容について
  - 二、岩蔵寺蔵大般若経の伝来
  - 三、宋版大般若経に書入れられた角筆の文字等
  - 四、宋版大般若経の角筆文献としての価値
- 〔附〕 岩蔵寺蔵大般若経巻次別一覧

一、岩蔵寺蔵大般若経の内容について

岩蔵寺は、佐賀県小城市小城町岩倉にある天台宗の古刹である。この寺院に、宋版の大般若経が五百六十七帖、和版及び補写の大般若経が二十五帖、他に表紙のみのもの数点が現蔵せられている。大般若経六百巻の殆どが現存し、そのうち約九十五パーセントが宋版で占められているわけである。

この宋版の大般若経のうち、四百九帖にはその表紙や巻末白紙部分等に、鎌倉時代の角筆の文字や図絵が書入れられている。その分量から見ても内容から見ても、今日までに発見せられた角筆文献には他に類を見ない重要な資料を提供するものである。

大般若経に書入れられた鎌倉時代の角筆文字等について

今般、文化庁の山本信吉氏の御高配に基き、佐賀県教育委員会の佛坂勝男氏の御世話を得て、岩蔵寺において同寺住職堤順栄師の御芳情により、鈴木恵・松本光隆両君の助力を得て、この大般若經の全巻を一応調査することが出来た。小稿はその調査報告である。

(一) 宋版大般若經

宋版は、巻第一から巻第六百に至るうち、計五百六十七帖を現存している<sup>(1)</sup>。その巻次別一覽は、附録として掲げた通りである。このうち、次の三十九帖<sup>(2)</sup>には、後掲の刊記がある。

卷第二十九、卷第四十二、卷第三百三十二、卷第五百五十六、卷第五百五十九、卷第七十七、卷第八十一、卷第九十二、卷第二百八、卷第二百三十九、卷第二百四十三、卷第二百五十六、卷第二百九十六、卷第三百、卷第三百九、卷第三百十四、卷第三百二十三、卷第三百二十四、卷第三百三十、卷第三百三十六、卷第三百四十二、卷第三百五十二、卷第三百六十四、卷第三百八十二、卷第三百九十九、卷第四百二十、卷第四百二十七、卷第四百三十四、卷第四百四十三、卷第四百六十二、卷第四百七十六、卷第四百八十一、卷第四百九十四、卷第四百九十六、卷第五百五、卷第五百二十二、卷第五百八十、卷第五百九十、卷第五百九十九

この三十九帖の刊記は刻版が全く同一である。今、卷第四十二の巻末にある刊記の全文を掲げる。

大宋国両浙路湖州帰安縣松亭郷思溪居住左武大夫密州觀

察使致仕王永從同妻恭人嚴氏弟忠翊郎永錫妻顧氏

姪武功郎冲允妻卜氏從義郎冲彦妻陳氏男迪功郎冲元

妻莫氏保義郎冲和妻呂氏與家眷等恭爲祝延

今上皇帝聖躬萬歲利樂法界一切有情謹發誠心

捐捨家財開鑿大藏經板忽伍伯伍拾函永遠印造

流通紹興二年四月 日謹題

雕經作頭李孜 季敏印經作頭 金紹

掌經沙門覺□

対経沙門仲謙 行堅 幹雕經沙門 法祖

対経慈覚大師静仁慧覚大師道融賜紫修敏

都対證湖州覚悟教院住持伝天台祖教真悟大師 宗監

勸縁平江府大慈院住持管内掌法伝天台教説法大師 浄梵

勸縁住持円覚禅院伝法沙門 懷深

開版の年号、紹興二年（一二三二）は南宋の初期、高宗の即位六年に当り、本邦では院政期の長承元年に相当する。又、刊記第一行の「思溪居住」により、いわゆる思溪版と呼ばれるものであることが分る。この思溪版に、圓覚禅院版紹興二年本と法宝資福禅寺版との二種があることは夙に小野玄妙氏が明らかにせられた。<sup>3)</sup> 岩蔵寺の大般若経は前者に属する。前者の思溪版で本邦に伝存しているものに南禅寺蔵の零本があることを、小野玄妙氏は「中観所縁録論」で示され、<sup>4)</sup> 辻森要脩氏は「長阿含経卷第二十二」で示された。<sup>5)</sup> これとの比較によって、鏡山猛氏は、三本の字句に少異があり、岩蔵寺の宋版跋文が南禅寺B版より後出のもの<sup>6)</sup>とされた。いずれにせよ、岩蔵寺の宋版は、現存量の多いことにおいて思溪圓覚禅院版の中でも特に注目せられるのである。

岩蔵寺蔵の宋版大般若経は、各巻とも、折本装で、天地三〇・六糎、幅一一・四糎である。天地に各一本ずつの横墨線があり、その間が二四・五糎ある。各面は六行十七字詰であり、六面を以て一紙としている。版心記は、巻第一に例をとると、「天一 卷 四 厳申」とある。「天」は千字文の首字、「一卷」は「大般若経第一卷」の意、「四」はその中の第四紙の意、「厳申」は刻工名である。

大般若経に書入れられた鎌倉時代の角筆文字等について

表紙はクリーム色の厚手の紙で、手沢で汚れているものが多いのは、この書が大般若経の転読や読誦に実際に屢々供せられて来たことを語っている。鎌倉時代に本邦に伝来した各種の宋版大藏経のうち、その表紙は、概して北宋版の福州本が紺帙紺表紙であり、南宋版の湖州本等が黄帙黄表紙であり、東宝記にもこの事情を語る記事があることを小野玄妙氏が言及せられたが、岩藏寺藏本も同じ黄表紙として圓覚禅院本の体裁に適用ものである。

表紙には、外題を「大般若経巻第」と版刷りしその下に「一百八 盈」などと各巻数と千字文とを墨書した符箋を貼附している。但し、この符箋が剥れたり、散佚したために墨書で直接に表紙に書き込んだりしたものもある。帙は現存しない。各帖は、内題・尾題をそれぞれ次のように刻し、

(内題) 大般若波羅蜜多経巻第五十一 宙

三藏法師玄奘奉 詔譯

(尾題) 大般若波羅蜜多経巻第五十一 宙

尾題の後に「釋音」を持つものがある。巻第五十一で例示すると、次のようである。

總善改反又善  
愛反一甲也 薩捶下丁  
果反 擲音臍  
甲也

このあとに、刊記を刻するものが三十九帖あることは前述の通りである。

訓点は、巻第一の一部分にだけ、朱筆の仮名と返点、および稀に白点の仮名が加えられている。江戸時代初期の加筆と見られる。

以上の内容の諸巻が、和版・補写本と共に、蓋付の木箱の経櫃三箱の中に分蔵せられている。

## (二) 和版大般若経 (補充卷)

和版は、巻第四百五十二から巻第四百五十九までの八帖と、巻第五百五十一・巻第五百五十二の二帖の計十帖がある。いずれも宋版の欠けている巻であるから、その欠巻部分を補充する意図で和版を以てしたものである。このうち、巻第四百

五十二、四百五十五、四百五十七は尾欠で、卷第四百五十三、四百五十九は断簡である。また、卷第五百五十一は後半が宋版（残簡）の裏を利用して寛永七年に補写しその前部三分の一が和版である。

和版も折本装で、天地三三・〇纏、幅一一・〇纏である。界線はなく、字高二〇・〇纏で、各面は六行十七字詰である。版心記は卷第四百五十二の例のように「五百内 六帙 一巻 三」とあるものと、卷第五百五十一のように「六百 六一十」と数字だけを並べたものがある。

卷第四百五十二の尾題には（現状は表紙が「五百五十二」とある）、

大般若波羅蜜多經卷第四百五十二阿闍梨實尊

と刻されている。「阿闍梨實尊」は発願者の名である。

この版が、東福寺版の「岢応安甲寅仲秋日」とあるものと同版であること、他も同版のものが多く、異版もあるが南北朝頃の開版が多いことを鏡山氏が述べられている。<sup>(8)</sup>

訓点は殆どないが、卷第四百五十八の中に、「是乘望所識」の「モウ」のような墨仮名（江戸時代初期）がある。

### (三) 補写大般若經

補写は、卷第一、卷第三十五、卷第六十一、卷第六十二、卷第四百二十六と、卷第五百六から五百九までの四卷、及び卷第五百五十一、卷第五百五十七の十一巻があり、他に巻次未詳の巻、約四帖分がある。尚、卷第十一は宋版であるが途中に五折半ほどの補写があり、卷第五百五十一、五百五十二は、和版にそれぞれ補写がある。いずれも宋版の欠けている巻であるから、その欠巻部分を補写したものである。

このうち、卷第五百八の奥書には、

八卷下四百八十八下字数七千七百九十二字也

爰藤原宗桂居士再興之

慶長七年壬午六月吉日成就之筆者禪瑞

とあり、巻第五百五十一の補写部分の奥書に、

寔寛永七年庚午大白寶於二徳院書之

とある。補写は、いずれも江戸時代初期であり、後者の奥書によれば、二徳院に宋版が移った時点でなされたものであろう。

## 二、岩蔵寺蔵大般若経の伝来

岩蔵寺蔵大般若経の伝来を知る資料として、先ずこの大般若経自体に墨書された文字がある。その一つは、右の補写奥書にある「二徳院」である。この二徳院の墨書は、巻第一の巻首の上欄にも「肥前国佐賀郡大財村鶴嶺山二徳院常住」、巻第五百九十一の巻首の上欄にも、「佐賀郡大財村鶴嶺山二徳院什物」とあり、他にも、巻第十一、二十一、三十一、四十一、五十一；等、十巻毎の帙頭に当る巻に書入れられている。

二徳院の由来は、巻第九十二、百九十一、二百九十八、五百三十一の四巻、それぞれの巻末に墨書されている次の記事で知られる（巻第九十二による。他も同文）。

夫當院大般若経曾我十郎助成同五郎時宗之家僕南江團三郎同（弟）鬼王／為亡君從宋朝請来而當國小城具寄附岩蔵寺為亡君菩提云慶長年／中當院開基團藤兵衛法名用山二徳居士捐白銀一貫目八木一百俵從岩蔵寺／請来寄附當院專祈現當二世功德也其後岩蔵寺先住某甲法印者二徳居士／之孫告知閑者云二徳院之般若元是出于當山願今欲以和朝新板般若一部並田地／一町贖之得哉云願今添以白金十貫目者送之還于山也於此法印志願亦唐／止矣享保始當院住僧某甲者質此経借八木十俵満田産之不足也噫實壳／三寶之一重罪從何是太哉山僧住院日深痛之托鉢於諸方之門戸以八木一十餘／俵贖此経再為當山第一之寶物也後五百歳譬復雖／及衰廢以此経寶與他缺／三寶之一則其時住侶者非佛子非沙門破法罪之因招五無間業必矣仍記之  
旨享保第十七壬子天四月佛生日

肥前州佐賀郡大財村鶴嶺山二徳禪院現住嗣祖沙門慧密誌之

二徳院は今は廃寺となっているが、その所在の大財村は現在佐賀市大財町にその名がそのまま残っている由である。<sup>(9)</sup>この大般若経が岩蔵寺から出て、慶長年中創立の二徳院に入り、享保十七年（一七三二）まではその所蔵であったことが分る。岩蔵寺に返却されたのは、当寺七十七世の尊舜の力であることが天明六年（一七八六）に書写された「宋本大般若経記」一巻の記事で判明する。左に本文六十二行から八十四行に至る巻尾の文章を掲げる。

當是時／小城賀州賢侯德孚上下学貫内外翔／建校樹以勵文武保釐邑里而恤黎庶／繼絶興替百廢皆举舜師乃捧募縁詣／延陳訴宿志／賢侯及萱堂浄明院主嘉其不忘本之衷駢捨／淨資助其力不幾得銀若干錠及京板／般若一部因致款曲於二徳見住某師／其師感戴舜師赤心輒許其請於是大／品真典再蔵岩蔵几歴二百許年乃復／舊庫云夫曾我昆弟孝子也寅子烈女／也鬼王兄弟忠臣也而佩刀與所手写／経不可復得唯此般若一部歴七百餘／霜巋然獨存者豈可不珍而重之哉况／三蔵聖教而本朝七部之一乎冀其將／來住侶深體舜師老婆心謹秘諸庫蔵／勿敢失墜長與山岩而無朽也余夙辱／舜師方外之交故請余記其概略以副／本経如此天明丙午季秋下浣之日

前肥佐嘉後學鶴山石有仲車撰

東都 龍洲 三井親孝拜書（朱方印二顆）

この文章は、右の奥書にあるように、天明六年に石有仲車が尊舜の依頼により、大般若経が岩蔵寺に再蔵せられるに至った事情を誌したものである。この本は卷子本で、布地表紙、金地見返に、本文は烏子紙に金泥野を引き、本文全八十四行を書いたものである。外題に「宋本大般若経記」、内題には「大品大般若経復歸岩蔵記」とあり、岩蔵寺に現蔵せられている。同じく岩蔵寺蔵の「雲海山浄土院来由記」（寛政十年、小城藩に提出した寺の由緒書の控）に「又此大般若経故アツテ佐賀龍泰寺末二徳院ノ暫什物トナル所ニ、小城加賀守通愈公当寺七十七世尊舜代又当寺ニ御寄附也 委細別記巻軸有之」とある。別記巻軸とは、右の「宋本大般若経記」に当る。

大般若経に書入れられた鎌倉時代の角筆文字等について

以来、今日に至るまで山外には出なかつたものと思われ<sup>(10)</sup>。

室町時代以前における伝来については、「宋本大般若経記」によると、次のような趣旨が書かれている。

(一)延暦年間に叡山西谷の聖命上人が桓武帝の勅を奉じて、小城郡高隈邑に雲海山岩蔵寺を創建した。

(二)建久年間に葉上僧正が後鳥羽帝の勅を奉じて中興し、比叡山延暦寺に則つて、岩蔵を東塔とし、花園(松尾山光勝寺)を西塔に准じ、清水を横川に比した。

(三)曾我兄弟の弟の妻子とその僕従の南江・鬼王・同弟團三郎とが岩蔵に詣り如法経会に参会し、主君の菩提を弔つた。

(四)宋印行の小品般若経を堀河帝が七部購入せられ、名刹七寺(阿蘇・高良・函崎・比叡山・法隆寺・天王寺・薬師寺)に配せられた。

その一本が肥後国阿蘇にあつたが、鬼王兄弟がこれを岩蔵寺に納めた。

(五)室町時代には兵火に罹つて、多くの院宇、塔などを失つたが、慶長年中に二徳院に買取られるまで、この小品大般若経は岩蔵寺に存した。

右のうち、曾我兄弟の郎党兩名等の伝承は、これを証する材料が得られない。

宋版のうち思溪圓覚禅院本が、鎌倉初期には本邦に伝来していたことは、高山寺旧蔵の唐本一切経目録<sup>(11)</sup>によつて知ることが出来る。この目録の奥書に次のようにある由である。

本記云／寛喜二年(一一三〇)庚寅八月三日於西山高山寺阿弥陀堂校勘唐本目錄悉注之舉重可合点矣

宋朝鄧峯城居書生周德榮於日本国高山寺関伽井坊重述此目錄

歲時仁治二年(一一四一)辛丑正月二十七日善写畢

私云／寛元二年(一一四四)甲辰十一月二十九日善写之訖申請野口房順性房本書所写留之也

本記端云／一切経転読 天福元年(一一三三)六月八日於高山寺唐本一切経蔵始之

順性房は明恵上人の弟子高信である。これによると寛喜二年八月三日に高山寺西経藏の北宋本一切経につき、之を湖州本（思溪圓覺禅院本）と対勘したというのである。

岩藏寺藏の思溪版大般若経が鎌倉時代に伝来せられたものであるかどうかは、書証が得難かったが、この経卷の表紙や卷末に書入れられた角筆の文字によって、文永十年（一二七三）には伝来せられていたことが判明し、しかも同じく書入れられた寺社名・僧名等によって、佐賀県のこの岩藏寺の近辺で、大般若経の転読・読誦に活用せられていたことが判明したのである。

### 三、宋版大般若経に書入れられた角筆の文字等

岩藏寺に現藏せられる宋版大般若経五百六十七帖のうち、四百九帖には、その前後の表紙や卷末の白紙部分等に、鎌倉時代の角筆の文字や図絵など多種多様のものが書入れられている。筆跡も一筆ではなく種々であり、角筆で書かれた凹みも、太いもの細いものや深淺があるが、角筆の文字で書かれた年紀が、鎌倉中期の文永十年（一二七三）を始めとして、鎌倉時代が終る元徳三年（一一三一）に至る諸年号があり、それらがそれぞれの時期の筆跡であることから見て、角筆の書入れは、鎌倉時代の中期末から後期末に至る五、六十年間になされたものであることが判明する。一方、欠巻部分に補充された和版には角筆の書入れは全く見られない。この和版の東福寺版は、南北朝時代の応安甲寅年（一三七四）の刊記があるから、この南北朝時代より前に角筆が書入れられたことを裏付けている。<sup>(13)</sup>

以下、その角筆の文字や図絵について述べる。

#### (一) 角筆の年紀について

宋版大般若経卷第二百十二には、その卷末の尾題「大般若波羅蜜多経卷第二百一十二／第二百一十二不出字」（墨版面）に続く白紙部分に、角筆で次の奥書が書入れられている。

大般若経に書入れられた鎌倉時代の角筆文字等について

〔角筆〕「元亨元年八月廿九日書<sub>レ</sub>加賀房尊賢敬」

又、卷第二百二十五にも、巻末の尾題「大般若波羅蜜多經卷第二百二十五 冬」〔墨版面〕に続く白紙部分に、角筆を以て、卷第二百十二の角筆と同筆跡（草体）で、

〔角筆〕「明星寺住人加賀房尊賢之」

と書入れられている。更に、卷第四百九十一には、巻末尾題に続き釈音を「殊伽亦其陵反引云云檀河也」〔墨版面〕と印刷した後の白紙部分に、角筆による図絵があり、すぐ続いて角筆を以て次のように書入れられている。

〔角筆〕「永仁五年九月一日明星寺式部房朝覺（花押）」

卷第二百十二、二百二十五の「加賀房尊賢」が草書体であるのに対して、これは行書体であり、筆跡も異なる。又、これには朝覺自身の花押が角筆で書かれている。又、卷第四百九十二の巻末尾題に続く白紙部分にも、角筆で、

〔角筆〕「延慶二年八月十七日円慶坊／正婦（花押）」

と又別筆の草書体で書かれ、正婦自身の花押まで角筆で書かれている。

卷第四百七十二には、巻末尾題に続く白紙部分に角筆の女手「け」は「遣」の変体仮名）で、

〔角筆〕「けんけん」

と書きさしされ、同巻の後表紙に、角筆の同筆で、

〔角筆〕「けんけん二年八月十四日」

と「乾元」を仮名で書いてある。

年紀は、このように表紙（後表紙が多い）にも角筆で書かれる。卷第二百四十一の後表紙には、

〔角筆〕「應長二年三月十七日僧禪与（花押）」

願申西にゆく處／願申西」〔草書体、「に」は「尔」の変体仮名

と角筆の又別筆で書かれ、禪与自身の花押もある。

以下、角筆で年紀が書かれたものを年次順に掲げる（右掲例は除く）。

○卷第五百五十五、一帖、前表紙、天地逆に書入れ

（角筆）「文永十年」

○卷第四百七十六、一帖、前表紙、天地逆に書入れ

（角筆）「建治二年改改幻改」

八月七日諸日」

○卷第五百九十、一帖、後表紙

（角筆）「建治二□八月七日僧（花押）」

○卷第四百九十四、一帖、後表紙

（角筆）「参河房／建治二年／参河人也」ナバリ」（梵字）／心覚 本具房」

○卷第五百三十一、一帖、後表紙、天地逆に書入れ

（角筆）「建治二年」／別角筆「明円□」

○卷第二百六十、一帖、後表紙

（角筆）「弘安三」

○卷第五百四、一帖、前表紙、天地逆に書入れ

（角筆）「弘安五年歲次壬午一月一日／林曾力□」

○卷第二百九十三、一帖、卷末尾題の次

（角筆）「弘安七年八月十三日」

大般若経に書入れられた鎌倉時代の角筆文字等について

○卷第四百七十九、一帖、後表紙

(角筆)「乾元二年「間」「間」は別筆か」

○卷第五百十二、一帖、後表紙

(角筆)「正和二年九月六日／乗智房／(圖繪アリ)／円祐房」

○卷第八十八、一帖、後表紙

(角筆)「正和四年八月廿二日／大進坊」

(前表紙、角筆、別筆)「隆海」(天地逆に書入れ)

○卷第五百十一、一帖、後表紙

(角筆)「正和五年九月六日／静念(花押)」

○卷第四十一、一帖、後表紙

(角筆)「成就<sup>(?)</sup>／正和五年九月□日」  
(破損)

○卷第八十一、一帖、後表紙

(角筆)「正和<sup>(?)</sup>年九月四日」

○卷第四百八十七、一帖、後表紙

(角筆)「報身 良円／元徳二年三月四日」

○卷第三百五十七、一帖、前表紙

(角筆)「願申 願申／願申西にゆく處<sup>(舎)</sup>／合利<sup>(舎)</sup>／元徳三年三月／十二日琳定」

その年紀は、文永十年(一二七三)、建治二年(一二七六)、弘安三年(一二八〇)、同五年、同七年、永仁五年(一二九七)、乾元二年(一三〇三)、延慶二年(一三〇九)、心長二年(一三一二)、正和二年(一三二三)、同四年、同五年、元亨元年(一三三一)

一)、元徳二年(二三三〇)、同三年が認められ、文永以後の鎌倉時代の諸年号が拾われる。その月は秋八月と九月が多く、春二月と三月が次ぎ、春秋のこの月に偏っている。これは、文永十年以降、五、六十年間にわたって、春秋に、大般若経の転読や読誦が行われたことと関係があり、その折々に角筆で書入れられた字句の集積と考えられるものである。

右の他にも、単なる「月」又は「日」や季節のみを角筆で書入れた字句もある。

二月(巻第一、前表紙) 如月(巻第四十八、後表紙) 如月の初(巻第五十三、後表紙) 九月(巻第七十一、後表紙) 八月九日

ち□□(巻第七十四、後表紙) 二三月(巻第七十六、後表紙) 八月十六日(巻第二百五十九、後表紙) 二月廿一日同廿八日(巻

第七十一、後表紙) 二月廿一日(巻第七十四、後表紙) 二月廿一日廿一(巻第七十五、後表紙) 八月十一日(巻第七

十九、後表紙) 二月十七日(巻第八十四、前表紙) 八月/智性(巻第二百五十五、前表紙) 文月(巻第二百六十四、後表紙)

二月十八日(巻第二百七十五、表紙見返) 正月(巻第二百八十七、後表紙) 二月十七日(巻第二百九十四、表紙裏側) 月<sup>つひ</sup>二月廿

日(巻第二百九十八、後表紙) 八月十日(巻第三百三十、後表紙) 八月/□□<sup>挙</sup>(巻第四百一、前表紙) 二月十八日(巻第四

百八、後表紙) 八月廿六日(巻第四百二十一、前表紙、天地逆に書入れ) 心覚房/二月廿二日(是かく)(巻第五百二十八、後表紙)

春(巻第八十六、前表紙) 性嚴「心覚」寂風<sup>春也</sup>(巻第五百三十二、後表紙) としの中春(巻第四百九十八、後表紙)

これらも春の二月三月、又は秋の八月九月に偏り(例外は「正月」が一例のみ)、やはり年紀のあるものの月と通ずる上に、筆跡も当時のものであるから、鎌倉時代の先述の時期の間に書かれたものであろう。

## (二) 角筆の寺社名について

宋版大般若経に書入れられた角筆の字句には、寺院や神社の名を記すものがある。角筆の年紀の項で取上げた例の中に「明星寺」が、巻第二百二十五に「明星寺住人加賀房尊賢之」、巻第四百九十一に「永仁五年九月一日明星寺式部房朝覺(花押)」と出ていた。他の巻にも、次のようにある。

### ○巻第三十、一帖、後表紙

大般若経に書入れられた鎌倉時代の角筆文字等について

(角筆) 「明星」〔破損〕 「良尊」／「月十七日」

○卷第二百八十六、一帖、後表紙

(角筆) 「明星寺經（マツ）」／「大智房」（マツ）?

○卷第四百七十七、一帖、後表紙

(角筆) 「八幡大菩薩」／「明（マツ）生寺」

○卷第五百十七、一帖、後表紙

(角筆) 「明星寺幾道」／「明星寺朗明」

○卷第四百九十七、一帖、後表紙

(角筆) 「明星」

卷第四百九十七の例は「明星」だけで「寺」がないが、同じく「明星寺」を指すと見られる。

同様に「寺」がないが、寺院を示すと見られるものに、

○卷第二百三十三、一帖、前表紙

(角筆) 「福満」

○卷第五百六十四、一帖

(前表紙角筆) 「大般若經卷第五百四十五也」（天地）  
（後表紙角筆） 「〔鍼〕の絵」／「福満」

の「福満」がある。「福満寺」を指すと見られる。

又、次の「円明」も、或いは「円明寺」を指すかも知れない。

○卷第三百五十、一帖、前表紙

(角筆)「妙性円明 凡夫」<sup>寺</sup>

又、神社名として、「椿八幡宮」が次のように角筆で書かれている。

○卷第五百三十、一帖、前表紙

(角筆)「椿八幡大井」

○卷第二百二十、一帖、尾題に続く白紙部分

(角筆)「椿御宮大般若経也」

○卷第四百十八、一帖、後表紙

(角筆)「椿宮之大般若経也」<sup>(天地)</sup>「主祖實」

○卷第三百十六、一帖、後表紙

(角筆)(角筆の絵図の間に)「椿」

○卷第三百三十九、一帖、後表紙

(角筆)「椿 椿□」

○卷第五百十三、一帖

(前表紙角筆)「□ 椿」

(後表紙角筆)「大般若経 鬼一見之(花押)」

尚、「八幡大菩薩」(卷第百八十一、後表紙)、「南无八幡大井」(卷第二百五十六、後表紙)もこの椿八幡を指すものであろう。

又「隆□大明神」も出て来る。

○卷第五百六十三、一帖、前表紙

(角筆)「大明神/隆推大明神」<sup>(?)</sup>

〔後表紙角筆〕「大明神 齊朝」

○卷第五百七十七、一帖、後表紙

〔角筆〕「隆推大明神□」

右のうち、卷第四百七十七には「八幡大菩薩」(樺八幡を指すものであろう)と「明星寺」とが共に記されており、両者に関係のあったことが知られる。

(三) 角筆の僧名、僧房名について

角筆で書かれた僧名、僧房名は総計五十数名が数えられる。先ず、年紀及び寺社名の項で掲げた、卷第二百十二の「元亨元年八月廿九日書了加賀房尊賢敬」、卷第二百二十五の「明星寺住人加賀房尊賢之」とある加賀房尊賢は、明星寺の住僧であったことが知られる。この明星寺の僧には、他にも、寺社名に掲げたように、

式部房朝覚(永仁五年  
花押) 良尊 大智房 幾道 朗明

があったことが分る。このうち、朗明は他巻にも次のように出て来る。

○卷第四百三十一、一帖、前表紙

〔角筆〕「執筆朗明書也」(天地  
逆書)

○卷第五百三十七、一帖、後表紙

〔角筆〕「求／朗明」

○卷第五百七十九、一帖、後表紙

〔角筆〕「隆源／隆源朗明」

このように、同一僧の名が、何帖かにわたって出て来るものがある。

〔心覚〕

願申西にゆく處□□／舎／心覚□□□□ (巻第二百四十六、後表紙)

心覚之 (巻第三百三十三、後表紙)

參河房／參川人也「ナバリ」(梵字) 建治二年／心覚 本具房 (巻第四百九十四、後表紙)

心覚房／二月廿二日はかく (巻第五百二十八、後表紙)

風圓／心覚 (巻第五百三十五、後表紙)

性敵「心覚」寂風春也「」は別角筆か (巻第五百三十一、後表紙)

〔朝海〕

朝海 (巻第八十三、前表紙)

朝海 (巻第二百二十七、後表紙)

朝海 (巻第二百二十八、後表紙)

□□ち朝海 (巻第二百二十九、後表紙)

明□□□／□朝海 (巻第三百八十七、後表紙)

〔隆海〕

「正和四年八月廿二日／大進坊」(巻第八十八、後表紙)、隆海 (巻第八十八、前表紙、天地逆書)

願申西にゆく處願申西／(絵) 隆海□□ (巻第三百四十一、後表紙)

願申西にゆく處願申／隆海 (巻第三百五十四、後表紙)

〔乘智房隆慶〕

乘智房 (巻第三百二十九、後表紙)

正和二年九月六日／乘智房 (巻第五百十二、後表紙)

大般若經に書入れられた鎌倉時代の角筆文字等について

乗智房／隆慶（卷第五百三十八、後表紙）

〔幻改〕

覺了幻改／幻改（卷第四百十一、後表紙）

建治二年改<sup>改</sup>幻改／八月七日諸日（卷第四百七十六、前表紙、天地逆書）

右の他に、次のような角筆の僧名や僧房名がある。

大明神 齊朝（卷第五百六十三、後表紙）

延慶二年八月十七日円慶坊／正婦（花押）（卷第四百九十二、卷末）

性嚴「心覺」（別角筆）寂風<sup>齋也</sup>（卷第五百三十二、後表紙）

正和五年九月六日／静念（花押）（卷第五百十一、後表紙）

（動物・人頭の図）甚慶之（卷第三百六十、前表紙、天地逆書）

俏性<sup>?</sup>（卷第七十九、後表紙）

禅深（花押）／願申西にゆく（以下欠）（卷第二百四十二、後表紙）

應長二年三月十七日僧禪与（花押）／願申西にゆく處（卷第二百四十一、後表紙）

態 未／僧態延<sup>?</sup>（この下僧の図あり）（卷第三百十九、後表紙）

八月／智性（卷第二百五十五、前表紙）

聰慈<sup>?</sup>（卷第三百五、後表紙）（僧名か否か存疑）

明尊人<sup>?</sup> 真如房（花押）（第五百七十一、後表紙）

妙性円明<sup>寺</sup> 凡夫（卷第三百五十、前表紙）

報身良円□／元徳二年三月四日□（卷第四百八十七、後表紙）

大□宮□本房良周（卷第二百七十八、卷末）

隆源／隆源朗明（卷第五百七十九、後表紙）

兵部房琳慶（花押）（卷第二百十、後表紙）

願申願申／願申西にゆく處／合利（舎）／元徳三年三月／十二日琳定（卷第三百五十七、前表紙）

圓慶之讀誦大般若經也（卷第四百十九、前表紙）

（兔の絵の下）圓忍（卷第四百四十六、後表紙）

願以此功德導（衆生カ）□□／□基（卷第五百七十二、後表紙）

公祐房（卷第五百八十六、後表紙）

乘行房（卷第六十一、前表紙）

真如房（卷第四百四十、後表紙）・真如房（花押）（卷第五百七十一、後表紙）

願申西にゆく處／「大海房之」（別角筆）（卷第四百四十四、後表紙）

正和四年八月廿二日大進坊（卷第八十八、後表紙）・隆海（同）、前表紙、天地逆書

願申西にゆく處／持乘房（卷第六十三、後表紙）

建治二年／「明□□」（房カ）（別角筆）（卷第五百三十一、後表紙、天地逆書）

円祐房（卷第五百十二、後表紙）

右弘智房弟子（僧頭の図あり）（卷第四百八十三、後表紙）

「風」字を中心とする図あり）□□房（卷第五百十六、後表紙）

參河房／參川人（マカ）也、「ナバリ」（梵字）／建治二年／心覚 本具房（卷第四百九十四、後表紙）

右のうち、卷第三百五十の「妙性円明 凡夫（寺）」の「円明」が「円明寺」を指すとすれば「妙性」は同寺にゆかりの僧となる。

大般若經に書入れられた鎌倉時代の角筆文字等について

この他、「小納言」(卷第三百七十一、後表紙)、「少納言(花押)」(卷第三百九十六、後表紙)がある。

(四) 角筆の經典名・仏名等について

角筆で書かれた經典名には「大般若経」に関する文字が次のようにある。

大般若経(卷第五十一、後表紙)、経(同、後表紙見返)

大般若経(卷第四百十五、後表紙)

椿宮之大般若経也(卷第四百十八、後表紙、天地逆書)

圓慶之讀誦大般若経也(卷第四百十九、前表紙)

椿御宮大般若経也(卷第二百二十、卷末部奥書)

願申西にゆく處／大般若経□人(卷第二百四十七、後表紙)

□若経(卷第三百九十、後表紙)

奉轉讀大般若(卷第四百九十一、後表紙、天地逆書)、永仁五年九月一日明星寺式部房朝覺(花押)(同、卷末奥書)

夫大般若者申六百卷也(卷第四百九十三、後表紙)

椿(八幡)(卷第五百十三前表紙)、大般若経鬼一見之(花押)(同、後表紙)

大般若経□(卷第五百四十一、前表紙)

大般若経卷第五百四十五也(卷第五百六十四、前表紙、天地逆書)、「鉞」の図あり、その下に「福満(同、後表紙)

大般若経卷第五百四十二也(卷第五百八十二、前表紙、天地逆書)

これにより、この宋版大般若経が轉読されたことや読誦されたものであること、それが明星寺の僧や福満寺の僧によってなされたこと、椿八幡宮の大般若経であったこと、又、一見されることもあったことなどが判る。

經典名には、他に「般若心経」「無量寿経」がある。

般若心經（卷第四百二十六、後表紙）

無量壽經 是 是（卷第五百二十八、前表紙、天地逆書）

又、称名や經典の文句等を抜書きしたものに、次のような角筆の字句がある。

南無尺迦牟尼佛（卷第四百三十三、後表紙）

南無阿（卷第五百五十、前表紙）

阿耨陁（卷第一百七十、後表紙）

阿弥陁佛（卷第二百九十五、後表紙見返）

佛説如是如是／八番返（卷第三百四十八、前表紙、天地逆書）

天日如来願申西にゆく處（卷第三百九十九、後表紙）

妙經也（卷第三百二十八、前表紙）

「天日如来」については後に触れる（注20参照）。

### (五) 角筆による一般語句について

角筆の文字には、漢字、平仮名、梵字が用いられている。それぞれについてその一端を示す。<sup>(14)</sup>

#### 1 角筆の漢字

角筆の漢字は、右掲のように年紀・寺社名・僧房名・經典名・称名などに用いられているが、他に一般語句を表すのにも用いられている。

イ、性嚴「心覚」寂 風養也（卷第五百三十二、後表紙）

ロ、参河房／参川人也<sup>(?)</sup>「ナバリ」（梵字） 建治二年／

心覚 本具房（卷第四百九十四、後表紙）

大般若經に書入れられた鎌倉時代の角筆文字等について

イは心覚（前掲）の入滅を示す記事らしく、その折の所感を「風、春也」と述べたものと見られる。ロも「參河房」が建治二年に入滅したことを心覚が記したのか。梵字ナバリは、「隠る」意の古語が、死去の意として用いられたものか。心覚にはこの種の記事があり、次のように時節などの所懐を簡潔に記したものもある。

ハ、風圓／心覚（巻第五百三十五、後表紙）

右は、「風マドカナリ」を表したものであろう。

ニ、月明（巻第五百五十四、後表紙）

これも、「月アキラカナリ」と読まれる。大般若経読誦の期間中に逸興のあったことは、「文治二年神宮大般若経転読記称俊集房参宮記(16)」によれば、伊勢神宮において大般若経を転読供養のために、六十口の南都僧が参り、同年四月廿六日から五月一日未明まで宿房にあったが、廿八日は「大雨自朝下滂如車軸、一会浸身万人舐鼻」により一日延期となったため、隙となり「人々相伴兒共、棹花船浮海上」して二見浦を見物して諸法師は和歌を作り、宿房に帰ってからも「逸興之余宴遊猶甚、乱舞狂歌、糸竹管絃、種々雑芸、終夜不休、其中小童字如意舞白拍子」している。

「風圓カナリ」「月明カナリ」も同様の、所懐の一端を述べたものであろう。

ホ、兒尻舐（巻第七十一、後表紙見返）、二月廿一日同廿八日（同、後表紙）

ヘ、兒尻(せうり)□□（巻第七十二、後表紙）

ト、尻（巻第七十三、後表紙）

「兒ノシリヲ舐ム」とは、どのような状況を意味するのか未詳であるが、先掲の大般若経転読記によると、「人々相伴兒共」とあり、寺院で召使った稚兒を指すものとすれば、鬱屈した禁欲生活における僧の戯言が、この角筆の文字に現れたものであろうか。

チ、賦月木（巻第三百四十九、後表紙）

は、連歌の賦物の標題を思わせる。

リ、妙性円明（寺） 凡夫（卷第三百五十、前表紙）

又、態人（卷第六十三、後表紙）

の「凡夫（ボンブ）」「態人（ワザビト）」と読まれる語句もあり、

ル、妹（卷第五百六十八、後表紙）、風（同、前表紙）

などもある。

## 2 角筆の平仮名・平仮名交り

角筆の平仮名（変体仮名）は、先掲の年紀の「けんけん二年」や「心覚房ノ二月廿二日はかく」を表すのに用いられる他、一般語句を表すものも多い。平仮名（変体仮名）による語句を書入れた巻は五十余帖が数えられるが、角筆が薄いことや変体仮名の草体が多くて現段階では解説できないものが多い。その中で、辛うじて判読し得たものについて述べる。

ヲ、「願申西（ネガシモウ）にゆく處」

この語句は多くの巻に書入れられており、一種の呪文のような趣がある。「に」は「尔」の変体仮名であり、漢字も甚しくくずれた草体である。卷五十二、五十三、五十四、五十七、五十八、五十九、百十、百四十四、百五十五、百六十三、百六十五、百六十七、百六十九、百七十、百八十一、百八十三、百八十八、二百四十一、二百四十二、二百四十三、二百四十四、二百四十六、二百四十七、三百四十一、三百四十三、三百四十五、三百四十六、三百四十七、三百四十九、三百五十四、三百五十五、三百五十七、三百八十、三百九十四、三百九十七、三百九十九、未詳巻の、計三十七帖にわたって、やや太めの角筆跡で書入れられている。その文脈は、

天日如来願申西にゆく處（卷第三百九十九、後表紙）（「天」はモトノママ）

願申西にゆく處（卷第三百四十三、後表紙）

大般若経に書入れられた鎌倉時代の角筆文字等について

願申西にゆく處／如月の初（巻第五十三、後表紙）

応長二年三月十七日僧禪与（花押）／願申西にゆく處／願申西（巻第二百四十一、後表紙）

願申願申／願申西にゆく處／合利（舍利）／元徳三年三月／十二日琳定（巻第三百五十七、前表紙）

願申西にゆく處／「大海房之」（巻第四百四十四、後表紙）

願申西にゆく處／持乘房（巻第六十三、後表紙）

願申西にゆく處／願申西にゆく處（巻第五十九、百十）

のようであり、天日如来に対して、異なった年月日に、異人がそれぞれ称えているようである。

ワ、「きゑゆく」

巻第三百九十二の後表紙には「きゑゆく」と読まれそうな変体仮名がある。「消え行く」の意か。

### 3 角筆の梵字

角筆の梵字は、先掲の「ナバリ」のような用い方もあるが、他にも種字などを書入れたりする。巻第九十三、百四十、二百四十八、二百五十八（a. *Kham van*）、二百六十七、三百五十、三百五十一、三百六十五、三百六十七、四百二十四、四百三十二、四百三十三、四百四十五、四百八十九、五百十五、五百二十五、五百二十七、五百七十三、五百九十七に書入れられている。この中には竹筆書様の梵字体を角筆で書いたものもある。この他の帖にも、梵字の書入れがあるらしいが、角筆の凹みが不分明で読解できないものも少なくない。

### (六) 角筆で描かれた図絵について

この宋版大般若経には角筆の文字の他に、角筆で書かれた図絵が認められる。その図絵の内容は人物、動植物、器具など多種多様であり、多くの巻にわたって書入れられている（以下は巻数を「一一六」のように表す）。

### 1 人物

人物(卷二一六、二七二、二八五、三三二、三三一、三三二、三四一、四四八、五〇二、五一二、五二六、五九九) 人物胸像(卷二〇一、三二四、四八八) 人物座像(卷三一九) 婦人(卷二八八) 女性(卷五二四) 中膝男(卷三九五) 老爺(卷五六六) 老婆(卷四九四) 武者(卷三八一) 衣冠(卷二〇二、三八八、四七〇、四七八) 衣冠首(卷一四三、五〇三、五六七) 首(卷三八、二六九、三三五、三五五、三五九、三六〇、四〇三、四三五、五〇一、五六二、五八三、五八五) 僧首(卷二六〇、四〇八、四六七、四八二、四八三)

僧形座像(卷四八六) 僧形(卷五八、二五四、一六九、二七六、四九二、五二二) 菩薩(卷一五九、二三一)  
仏(卷一六九) 仏頭(卷五八三) 仏像(卷五一四)

## 2 動物

動物(卷二七四、三五八、三八七、五〇一、五三四) 馬(卷三三七、二五二、二五五、二七九、二八一、三二六、五三〇) 馬頭(卷二三九、四六六) 馬尻(卷二九二) 牛頭(卷一七八、四九九) 犬(卷三二四) 鹿(卷二九一、四三四) 兎(卷一三一、三一七、三七五、三九一、四四六、五三二)

鳥(卷一四、二七七) 飛鳥(卷五六七) 鶴(卷二七七、二七八) 雁(卷四八二、五三六)  
鬼(卷二七八、五五三、五五八、五六四、五六九、五九二) 天狗(卷五二五) 龍(卷三六〇)

## 3 魚類

海老(卷二六一)

## 4 植物

蓮華(卷三三、五一、五二、九七、一一一、一三八、一四六、一四七、一四九、一五〇、一七三、二二四、二三八、二四一、二八三、二八四、二八六、二九五、三〇二、三一、三一九、三五五、三七六、三九〇、三九二、四七五、四八一、四九三、四九八、五〇四、五一二、五一四、五一七、五一八、五一九、五八〇、五八一、五八三、五八七、五九八) 蓮葉(卷五八、二八二、三八二、四九二)

蓮根(卷三八二) 植物(卷一五〇) 葉(卷五七、一一一、二六三、四九七、五二五) 花(卷六一、一九七、二五八、二六三、三二六、四一六、四三二、五〇二) 草花(卷九九、二〇二、二二七、二四四) 梅枝(卷二七八) 柳枝(卷二四二) 樹枝(卷三一九) 栗(卷二五二) 樹葉(卷一七五、二八一、三七二、三七三、三七七、四一六、四九一、五八三) 双葉(卷四二九) 五弁花(卷四六九) 六弁花(卷一九三、一九四) 芒(卷五六二)

## 5 武器・器具

刀(卷四七六、五二六、五九二、五九四) 劍(卷五六二) 甲(卷五六八) 弓・鏑矢(卷五九八) 鉞(卷五三、五五九、五六四) 竹編器具(卷二七五) 家屋カ(卷五二四)

## 6 模様その他

三角形(卷二二二) 三ツ巴紋(卷一八四) 弧(卷一九二、三三〇) 渦卷(卷二五五、三七六、五六九) 菱形(卷四二八) 旭日(卷一七七) 未詳

卷四、二二二、二九、三六、四一、四二、五一、六七、七二、七八、八五、九〇、九四、九五、一〇一、一〇二、一〇五、一〇九、一一五、一二六、一二七、一二一、一二五、一二八、一二九、一三一、一三四、一三五、一三六、一三九、一四〇、一四一、一五五、一六五、一六六、一六八、一七〇、一七三、一七七、一七九、一八九、一九一、一九三、一九五、一九六、二〇〇、二〇四、二〇六、二〇八、二二〇、二二九、二二〇、二三四、二三五、二二八、二二九、二三〇、二三〇、二二二、二四七、二五一、二六一、二六三、二六四、二七二、二七四、二七七、二七九、二八一、二八三、二八七、二八九、二九〇、二九四、二九七、三〇〇、三〇一、三〇二、三〇三、三〇四、三〇六、三一四、三二一、三二六、三二七、三二八、三三五、三三八、三三九、三四一、三五三、三五六、三六〇、三六二、三六三、三六四、三六六、三六八、三六九、三七六、三八〇、三八九、三九一、三九九、四〇〇、四〇一、四〇四、四一四、四一五、四一八、四二一、四二二、四二三、四二四、四二五、四二六、四二九、四三〇、四三一、四三五、四三七、四三九、四四二、四四三、四四三、四四三、四四七、

四四九、四五〇、四六一、四六三、四六八、四六九、四七一、四七四、四七八、四七九、四八一、四八二、四九六、四九  
九、五〇一、五〇八、五〇九、五一四、五一六、五二九、五三三、五三四、五三五、五三六、五三七、五三八、五四五、  
五五四、五五六、五六八、五七〇、五七三、五七六、五八〇、五八五、五九六、六〇〇

未詳の中には、角筆の凹みが薄れたために判別することが出来ないものもあるが、今後の精査により認定出来るものも少  
なくないものと思われる。

これらの多種多様にして多量の角筆図絵は、筆致が彼の高山寺蔵の鳥獸戯画を思わせるものであり、鎌倉時代の風俗画と  
しても注目せられるものと考えられる。

#### 四、宋版大般若経の角筆文献としての価値

岩蔵寺蔵の宋版大般若経に書入れられた、角筆の文字や図絵は、その年紀によって、時代が鎌倉時代の文永から元徳に至  
る五、六十年間のものであることが知られた。ではどの地方で書入れられたものであろうか。その手掛りは、角筆で書入れ  
られた、寺名や僧名にある。

先ず、寺名のうち、福満寺（巻第二百三十三、五百六十四の「福満」による）は、河副荘に在った、もと天台宗の古刹である。  
延暦二十四年伝教大師の草創といい、鎌倉時代には源頼朝の祈願所となり、北条時政も伽藍を重建している。河副荘は京都  
洛東最勝寺の荘園で、佐賀市の南、有明海に臨む広大な地域であった。この地方の中世の古文書には河副荘と福満寺が屢々  
出て来る。<sup>16)</sup>又、岩蔵寺では、寺中末寺として「福満寺」（平原）を挙げている。

卷第三百五十の「妙性円明<sup>寺</sup> 凡夫」の「円明」が円明寺とすれば、これも岩蔵寺の寺中末寺に「円明寺」（吉田）があり、  
これに当ると思われる。

岩蔵寺縁起及び岩蔵寺文書等によれば、中世には、山内外に多くの末寺僧坊を持ち、また、神社として「天山神宮および

末社敷地二百九十六社」を抱えていたという。

角筆の「明星寺」「椿八幡」は未詳である。椿八幡神社は豊前国の東国東郡武蔵町に郷社があるが、それではなく、恐らく岩蔵寺抱宮であった「八幡宮」の一つであろう。明星寺も末寺の一つであろうか。

次に、僧名を見るに、卷第三百五十の「妙性円明(寺) 凡夫」とある「妙性」は、高城寺文書の「極楽寺免田等安堵申状并具書案」に、次のように出て来る。

備前前司入道妙性／宛行惠光坊尊然所／肥前国河副莊極楽寺別當職事／

右、任去弘安三年十月五日法橋明尊讓状、領知本免有限／寺役修造、無懈怠令勤仕、可被致公家武家御祈禱忠之状如件／  
正応三年九月十五日 沙弥在朝

妙性は備前前司であり、(18)河副莊といい正応三年といい場所も年代も合っている。又、卷第五百七十一の「明尊」がこう読まれるならば、右の文書中の「法橋明尊」とも関係し、同一文書中に、関係僧名が二人も出て来ることになるのである。

又、卷第四百八十七の後表紙に、

(角筆) 報身 良円(梵字カ)

元徳二年三月四日

とある、良円も、東妙寺文書の「安達時顕裁許状写」に、

肥前国東妙寺知事良円申、小城郡西方諸田名内田地志町右事、如元、為阿弥陀経免田、可令領掌之状如件／ 文保三年

正月卅日 秋田城介(花押影)

「東妙寺知事良円」とある僧と、場所も合い、時代も元徳二年(二三三〇)より十一年前が文保三年であるので一致する。

以上によれば、宋版大般若経の角筆の文字や絵は、鎌倉中・後期に、岩蔵寺所在の肥前国において書入れられたものと考えられる。或いは岩蔵寺ゆかりの末寺や抱宮でその関係者が書入れたかも知れない。(20)

当時、肥前国においても、大般若経の転読・読誦が行われたことは、

今寄進地内志町者、為於大明神御宝前毎月大般若経壹部転読料是、志町者為当社修理造営料田也

(武雄神社文書、菊地武頭田地寄進状)

為臨時□祈禱、奉読誦大般若経一部仁王講百座御神楽等、御卷数函一合令進上候(武雄神社文書、武雄社女大宮司卷数送状)

当国佐嘉郡寺法浄寺内字沙走田地志町、毎月為大般若経転読、武雄社目当作所奉寄進也(同右、菊地武頭書状)

肥前国神崎莊榑田宮宝殿以下所々流血事／注進状其沙汰畢、転読大般若経可致御祈禱精诚之旨(榑田神社文書、一色直氏書下)などや、「大般若免志町」(正和四年五月二日)、「大般若免五段」(元徳元年十二月廿五日)、「四季大般若免志町」(元亨三年十月廿一日)(以上、河上宮古文書写)、「大般若経真(読祈禱力)目録」(光浄寺文書、少式冬尚卷数返事)などで知られる。

角筆の經典名等に、「圓慶之讀誦大般若経也」「奉轉讀大般若…永仁五年九月一日明星寺式部房朝覺」「椿(八幡)…大般若経鬼一見之」などと書入れられていることは、この宋版大般若経が、当時、この地方で、実際に転読・読誦されたことを証するものであり、この文献はその具体的な資料となるのである。

角筆の文字についての以上の事柄に基き、この宋版大般若経の角筆文献としての価値を挙げると、次のようになる。

第一は、角筆の年紀である。今日までに見出された角筆文献は、昭和五十六年十月現在で八十二点に上るが、他のものは、角筆の年紀が一つも見付かっていなかった。この宋版大般若経の角筆が始めてであり、しかも年号を持つものが二十一帖、月日だけのものまで加えれば、五十帖に近い多数の資料が得られたわけである。これによって鎌倉時代の文永十年―元徳三年に角筆の用いられたことが確認されることになった。

一方宋版大蔵経の本邦伝来の時期については、高山寺本一切経目録によって、寛喜二年には伝来されることが知られるが、思溪版大般若経が文永十年には九州に伝来していたことが、この大般若経に書入れられた角筆の年紀によって、確認せられるのである。

第二は、角筆の寺社名・僧名である。従来の角筆文献では、「禪智房」という僧名が、高山寺蔵の宋版一切経の欄外（角筆文字は鎌倉初期）から得られ、<sup>(21)</sup>「西大寺仙尊之」という寺名と僧名が西大寺蔵文殊講伽陀室町期写本から得られた程度であった。この宋版大般若経の角筆には五十数名の僧名と数ヶ所の寺院・八幡宮とが認められた。

第三は、右の寺社名、僧名が肥前国関係と考えられることによって、九州という地方で角筆文献が始めて見出されただけでなく、そこで実際に使用せられたことを示している。地方における角筆文献としては瀬戸内海の大三島にある大山祇神社蔵の伊予三嶋社縁起（室町時代写）の角筆点に次ぐものであるが、九州としては第一号である。

第四は、この宋版大般若経の角筆が、文永十年から元徳三年までの五、六十年間にわたり、少くとも五十数名の僧によって書入れられたことにより、角筆の使用が或期間を通じて或地域における集団の中で行われたことが証せられることになった。

第五は、この角筆が、大般若経の転読・読誦に際して書入れられたことにより、この宋版大般若経がその実際に供せられた経典であることが判明し、当時、この地方における大般若経の転読・読誦の状況の一端が具体的に知られるに至った。先掲の「神宮大般若経転読記」によれば、「東大寺勸進上人重源、為当寺造宮祈禱、於大神宮大般若経書写供養并転読聞事<sup>三ヶ</sup>、文治式年四月廿六日、外宮法案於常明寺供養<sup>導師南都尊勝院僧都弁曉</sup>、同廿七日、六十口南景僧転読」等の諸記事や六十口僧名なども知られるが、外面的な儀式としての記事であって、具体的に、例えば、どの巻々を誰僧がどのように読誦したか、というようなことについては未詳である。

これに対して、角筆の文字によると、心覚は少くとも、巻二四六、三三三、四九四、五二八、五三二、五三五の各巻を、朝海は少くとも、巻八三、一二七—一二九、三八七の各巻を持ったことが知られ、又、前述のように、この宋版大般若経はこの地方では春（二・三月）、秋（八・九月）に読誦せられたことなど、生の資料が得られ、当時の仏教史・文化史の資料となるのである。

第六は、角筆で書かれた言葉の問題である。

年号を角筆の平仮名（変体仮名）で書いた「けんけん二年八月十四日」（巻四七二）は、「乾元」の「元」の合拗音を「くゑ

ん」と書かずに、直音の「けん」と表記している。これが当時の発音を反映するものとすれば、現代語の発音と同じ音を當時この地方で発音していた例となり、国語史の一資料たりうるのである。角筆の平仮名には未だ読解し得ないものが多く、これらが読解し得たならば国語史研究上の諸資料を提供することになるであろう。

角筆の漢字には、「兒屍𦍋」のような語順や、「態人」「凡夫」のような語詞もあり、これも亦国語史研究の資料たりうるのである。

第七に、角筆で書かれた図絵がある。これらの多種多量の図絵は、鎌倉時代の風俗史の新資料としても役立つものと思われる。

最後に、この宋版大般若経に角筆でこのような文字等を書入れた意図について見るに、巻第四百十一の後表紙に「覚了、幻改」とあるように、「覚え」としてこれを書入れたのであろう。「覚え」に墨書を使わずに、目立ち難い角筆の凹みを使ったのは、海彼大陸より伝来の宋版大般若経という貴重な経典を汚すまいという意識が働いたと解せられるのである。

〔附記〕 校正に際して佐々木峻氏の教示と助力を得た。記して謝意を表する。

#### 注

(1) 岩藏寺蔵の大般若経を世に紹介された論考に、鏡山猛「九州に伝来した宋代文物拾遺」(松崎寿和教授退官記念論文集「考古論集」、一九七七年三月)、同「佐賀県小城市岩藏寺の大般若経について」(九州歴史資料館「研究論集」5、一九七九年三月)がある。特に後者には、宋版についての詳細な報告、和版についての考証に併せて、「迹文」についての報告がある。

「迹文」というのは、本稿に言う「角筆の文字・絵」のことである。この迹文に気づかれたのは大般若経を寺に返却する日の由で、前半に当る三百巻までについての報告がある。このように本文献の角筆を最初に見付けられたのは、九州歴史資料館の方々である。筆者はその功に導かれて、巻三百一以降も併せて全巻の調査が出来たものである。尚、宋版等の帖教については、筆者らの調査と少異がある。

(2) 注1文献では三十四冊と数えているが、他に巻第四十二、同百三十二、同百七十七、同二百八、同三百の五帖にも刊記が認められる。

(3) 小野玄妙「南宋思溪版圓覚禅院大蔵と資福禅寺大蔵」(佛典研究、第二巻第十八号、昭和五年十月)

(4) 注3文献。

(5) 辻森要脩「南禅大蔵跋文蒐録」(佛典研究、第一巻第五号、昭和四年九月)。

大般若経に書入れられた鎌倉時代の角筆文字等について

- (6) 注1文献。
- (7) 注3文献。
- (8) 注1文献。
- (9) 注1文献。
- (10) 幕末頃に岩蔵寺にあったことは、天保四年(一八三三)の「肥前国佐賀領見聞誌」の「岩蔵寺」の項に「宋版大般若経あり」云々とある記事(注1文献)、にて知られる。
- (11) 高山寺経蔵には「唐本一切経目錄卷上、卷下」二帖(第四部二〇八函7号)が現存する。しかしこの本には奥書が見られない。ここに引用するのは、小野玄妙氏の注3文献によるものである。小野氏は「高山寺旧蔵」と記されており、右の唐本一切経目錄とは別本であろう。
- (12) 高山寺西経蔵に唐本一切経が当時存したことは、「高山寺聖教目錄」(重文第一部244号)鎌倉中期書写本(建長目錄)に、一切経二部之内
- 一部唐本納西経蔵 刑部入道渡進  
一部納粟経蔵 宰相僧都真通之進
- とあるのによつて確かめられる。
- (13) 江戸初期に補写した巻の中には、表紙に角筆の文字等のあるものが存する。これは表紙に宋版の古表紙を流用した結果であつて、その角筆の文字の筆跡も鎌倉時代と見られるものである。
- (14) 角筆の凹みが消えかかっている上に、転読などの手沢によりその文字が読み難いものが多く、更に匂々の調査のために、全部を讀解し得ていない。
- (15) 統群書類従巻第七百四十二所収による。
- (16) 高城寺文書、竜造寺文書、実相院文書等。「靈仙寺跡」(東脊振村文化財調査報告書第四集、佐賀県東脊振村教育委員会、昭和五十五年三月)。
- (17) 佐賀県史料集成所収。高城寺も河副荘内にあつたことは、高城寺文書から知られる。
- (18) 妙性<sup>(妙性)</sup>は、高城寺文書の「滋野長経打渡状」にも、「肥前国河副荘内高城寺領、任故備前入道寄進状并松浦一族一揆状之旨、打渡寺家候畢、仍為後一揆状如件/貞和三年二月六日 田所滋野最経(花押)」とある。
- (19) 佐賀県史料集成所収。

(20) 堤順栄師は、卷第三百九十九の「天日如来願申西にゆく處」を「天山信仰」と結びつけて考えられている。「天山」は岩蔵寺の背後に聳える靈峰で、天山神宮は薬師如来を本地とする。

(21) 小林芳規「高山寺蔵の角筆文献について」『高山寺典籍文書の研究』昭和五十五年十二月。

(22) 小林芳規「角筆点資料における石山寺蔵本の位置」『石山寺の研究―一切経篇―』昭和五十三年三月。

〔附〕 岩蔵寺蔵大般若経卷次別一覽

卷一	宋版	角筆アリ	朱・白書訓点アリ、「二徳院常住」墨書アリ	卷一九	宋版	角筆アリ	「二徳院常住」墨書アリ
二	"	"	"	二〇	"	"	"
三	"	"	"	二一	"	"	"
四	"	"	"	二二	"	"	"
五	"	"	"	二三	"	"	"
六	"	"	"	二四	"	"	"
七	"	"	"	二五	"	"	"
八	"	"	"	二六	"	"	"
九	"	"	"	二七	"	"	"
一〇	"	"	"	二八	"	"	"
一一	"	"	"	二九	"	"	"
一二	"	"	"	三〇	"	"	"
一三	"	"	"	三一	"	"	"
一四	"	"	"	三二	"	"	"
一五	"	"	"	三三	"	"	"
一六	"	"	"	三四	"	"	"
一七	"	"	"	三五	"	"	"
一八	"	"	"	三六	"	"	"

大般若経に書入れられた鎌倉時代の角筆文字等について

卷三七

宋版

六一	〃	角筆アリ	「二徳院什物」墨書アリ
六〇	〃	〃	〃
五九	〃	角筆アリ	〃
五八	〃	角筆アリ	〃
五七	〃	角筆アリ	〃
五六	〃	〃	〃
五五	〃	〃	〃
五四	〃	角筆アリ	〃
五三	〃	角筆アリ	〃
五二	〃	角筆アリ	〃
五一	〃	角筆アリ	「二徳院什物」墨書アリ
五〇	〃	角筆アリ	〃
四九	〃	〃	〃
四八	〃	角筆アリ	〃
四七	〃	〃	〃
四六	〃	〃	〃
四五	〃	〃	〃
四四	〃	角筆存否未詳	〃
四三	〃	〃	〃
四二	〃	刊記アリ	〃
四一	〃	角筆アリ	「二徳院什物」墨書アリ
四〇	〃	〃	〃
三九	〃	〃	〃
三八	〃	〃	〃

卷六二

宋版

八六	〃	角筆アリ	〃
八五	〃	角筆アリ	〃
八四	〃	〃	〃
八三	〃	角筆アリ	〃
八二	〃	〃	〃
八一	〃	角筆アリ	「二徳院什物」墨書アリ
八〇	〃	〃	〃
七九	〃	角筆アリ	〃
七八	〃	角筆アリ	〃
七七	〃	〃	〃
七六	〃	角筆アリ	〃
七五	〃	〃	〃
七四	〃	角筆アリ	〃
七三	〃	角筆アリ	〃
七二	〃	角筆アリ	〃
七一	〃	角筆アリ	「二徳院什物」墨書アリ
七〇	〃	〃	〃
六九	〃	〃	〃
六八	〃	〃	〃
六七	〃	角筆アリ	〃
六六	〃	〃	〃
六五	〃	〃	〃
六四	〃	〃	〃
六三	〃	角筆アリ	〃



卷一三七

宋版

角筆アリ

卷一六二

補写

角筆アリ

古表紙卷尾欠

一三八	角筆アリ		
一三九	角筆アリ		
一四〇	角筆アリ		
一四一	角筆アリ		「二徳院什物」墨書アリ
一四二			
一四三	角筆アリ		
一四四	角筆アリ		
一四五	角筆アリ		
一四六	角筆アリ		
一四七	角筆アリ		
一四八	角筆アリ		
一四九	角筆アリ		
一五〇	角筆アリ		
一五一	角筆存否未詳		「二徳院什物」墨書アリ
一五二			
一五三	角筆存否未詳		
一五四	角筆アリ		
一五五	角筆アリ		
一五六	角筆アリ	刊記アリ	
一五七			
一五八			
一五九	角筆アリ	刊記アリ	
一六〇	角筆アリ		
一六一	角筆アリ	補写	古表紙

一六二	角筆アリ		
一六三	角筆アリ		
一六四			
一六五	角筆アリ		
一六六	角筆アリ		
一六七	角筆アリ		
一六八	角筆アリ		
一六九	角筆アリ		
一七〇	角筆アリ		
一七一	角筆アリ		「二徳院什物」墨書アリ
一七二	角筆アリ		
一七三	角筆アリ		
一七四	角筆アリ		
一七五	角筆アリ		
一七六	角筆アリ		
一七七	角筆アリ	刊記アリ	
一七八	角筆アリ		
一七九	角筆アリ		
一八〇(欠卷)			
一八一	角筆アリ	刊記アリ	「二徳院什物」墨書アリ
一八二	角筆アリ		
一八三	角筆アリ		
一八四	角筆アリ		
一八五			
一八六			



二二七	卷二三七	宋版	角筆アリ	
二三八	"	"	角筆アリ	
二二九	"	刊記アリ	角筆アリ	
二四〇	"	"	角筆アリ	
二四一	"	"	角筆アリ	「二徳院什物」墨書アリ
二四二	"	"	角筆アリ	
二四三	"	刊記アリ	角筆アリ	
二四四	"	"	角筆アリ	
二四五	"	"	角筆アリ	
二四六	"	"	角筆アリ	
二四七	"	"	角筆アリ	
二四八	"	"	角筆アリ	
二四九(欠卷)				
二五〇	宋版			
二五一	"	"	角筆アリ	「二徳院什物」墨書アリ
二五二	"	"	角筆アリ	
二五三	"	"	角筆アリ	
二五四	"	"	角筆アリ	
二五五	"	"	角筆アリ	
二五六	"	刊記アリ	角筆アリ	
二五七	"	"	角筆アリ	
二五八	"	"	角筆アリ	
二五九	"	"	角筆アリ	裏表紙欠
二六〇	"	"	角筆アリ	
二六一	"	"	角筆アリ	「二徳院什物」墨書アリ

二六二	卷二六二	宋版	角筆アリ	
二六三	"	"	角筆アリ	
二六四	"	"	角筆アリ	
二六五	"	"	角筆アリ	
二六六	"	"	角筆アリ	
二六七	"	"	角筆アリ	
二六八	"	"	角筆アリ	
二六九	"	"	角筆アリ	
二七〇	"	"	角筆アリ	
二七一	"	"	角筆アリ	「二徳院什物」墨書アリ
二七二	"	"	角筆アリ	
二七三	"	"	角筆アリ	
二七四	"	"	角筆アリ	
二七五	"	"	角筆アリ	卷頭補写アリ
二七六	"	"	角筆アリ	
二七七	"	"	角筆アリ	
二七八	"	"	角筆アリ	
二七九	"	"	角筆アリ	
二八〇	"	"	角筆アリ	
二八一	"	"	角筆アリ	「二徳院什物」墨書アリ
二八二	"	"	角筆アリ	
二八三	"	"	角筆アリ	
二八四	"	"	角筆アリ	
二八五	"	"	角筆アリ	
二八六	"	"	角筆アリ	

二八七	宋版	角筆アリ	
二八八	"	角筆アリ	
二八九	"	角筆アリ	
二九〇	"	角筆アリ	
二九一	"	角筆アリ	「二徳院什物」墨書アリ
二九二	"	角筆アリ	
二九三	"	角筆アリ	補写アリ
二九四	"	角筆アリ	
二九五	"	角筆アリ	
二九六	"	角筆アリ	刊記アリ
二九七	"	角筆アリ	
二九八	"	角筆アリ	享保十七年 奥書アリ
二九九	"	角筆アリ	
三〇〇	"	角筆アリ	刊記アリ
三〇一	"	角筆アリ	
三〇二	"	角筆アリ	「二徳院什物」墨書アリ
三〇三	"	角筆アリ	
三〇四	"	角筆アリ	
三〇五	"	角筆アリ	
三〇六	"	角筆アリ	
三〇七	"	角筆アリ	
三〇八	"	角筆アリ	
三〇九	"	角筆アリ	刊記アリ
三一〇	"	角筆アリ	
三一	"	角筆アリ	「二徳院什物」墨書アリ

大般若経に書入れられた鎌倉時代の角筆文字等について

三二二	宋版	角筆アリ	
三二三	"	角筆アリ	
三二四	"	角筆アリ	刊記アリ
三二五	"	角筆アリ	
三二六	"	角筆アリ	
三二七	"	角筆アリ	
三二八	"	角筆アリ	
三二九	"	角筆アリ	
三三〇	"	角筆アリ	刊記アリ
三三一	"	角筆アリ	
三三二	"	角筆アリ	
三三三	"	角筆アリ	
三三四	"	角筆アリ	
三三五	"	角筆アリ	
三三六	"	角筆アリ	刊記アリ

「二徳院什物」墨書アリ

「二徳院什物」墨書アリ

卷三三七

宋版

卷三六二

宋版

三三八	角筆アリ	「二徳院什物」墨書アリ
三三九	角筆アリ	
三四〇	裏表紙欠	
三四一	角筆アリ	「二徳院什物」墨書アリ
三四二	角筆アリ	角筆ノ上黒点線ニテナゾ
三四三	角筆アリ	
三四四	裏表紙欠	
三四五	角筆アリ	
三四六	角筆アリ	
三四七	角筆アリ	
三四八	角筆アリ	
三四九	角筆アリ	
三五〇	角筆アリ	
三五一	角筆アリ	「二徳院什物」墨書アリ
三五二	角筆アリ	
三五三	角筆アリ	
三五四	角筆アリ	
三五五	角筆アリ	
三五六	角筆アリ	
三五七	角筆アリ	
三五八	角筆アリ	
三五九	角筆アリ	
三六〇	角筆アリ	
三六一	角筆アリ	「二徳院什物」墨書アリ

三六二	角筆アリ	
三六三	角筆アリ	
三六四	角筆アリ	刊記アリ
三六五	角筆アリ	
三六六	角筆アリ	
三六七	角筆アリ	
三六八	角筆アリ	
三六九	角筆アリ	
三七〇	角筆アリ	
三七一	角筆アリ	「二徳院什物」墨書アリ
三七二	角筆アリ	
三七三	角筆アリ	
三七四	角筆アリ	
三七五	角筆アリ	
三七六	角筆アリ	
三七七	角筆アリ	裏表紙欠
三七八	角筆アリ	
三七九	角筆アリ	
三八〇	角筆アリ	
三八一	角筆アリ	「二徳院什物」墨書アリ
三八二	角筆アリ	
三八三	角筆アリ	
三八四	角筆アリ	
三八五	角筆アリ	裏表紙欠
三八六	角筆アリ	

卷三八七 宋版

三八八 角筆アリ

三八九 角筆アリ

三九〇 角筆アリ

三九一 角筆アリ

三九二 角筆アリ

三九三 角筆アリ

三九四 角筆アリ

三九五 角筆アリ

三九六 角筆アリ

三九七 角筆アリ

三九八 角筆アリ

三九九 角筆アリ

四〇〇 角筆アリ

四〇一 角筆アリ

四〇二 角筆アリ

四〇三 角筆アリ

四〇四 角筆アリ

四〇五 角筆アリ

四〇六 角筆アリ

四〇七 角筆アリ

四〇八 角筆アリ

四〇九 角筆アリ

四一〇 角筆アリ

四一一 角筆アリ

大般若経に書入れられた鎌倉時代の角筆文字等について

卷四一二 宋版

四一三 角筆アリ

四一四 角筆アリ

四一五 角筆アリ

四一六 角筆アリ

四一七 角筆アリ

四一八 角筆アリ

四一九 角筆アリ

四二〇 角筆アリ

四二一 角筆アリ

四二二 角筆アリ

四二三 角筆アリ

四二四 角筆アリ

四二五 角筆アリ

四二六 角筆アリ

四二七 角筆アリ

四二八 角筆アリ

四二九 角筆アリ

四三〇 角筆アリ

四三一 角筆アリ

四三二 角筆アリ

四三三 角筆アリ

四三四 角筆アリ

四三五 角筆アリ

四三六 角筆アリ

四五



卷四八七 宋版

四八八 " 角筆アリ

四八九 " 角筆アリ

四九〇 " 角筆アリ

四九一 " 角筆アリ  
「二徳院什物」墨書アリ

四九二 " 角筆アリ

四九三 " 角筆アリ

四九四 " 角筆アリ

四九五 " 角筆アリ

四九六 " 角筆アリ

四九七 " 角筆アリ

四九八 " 角筆アリ

四九九 " 角筆アリ

五〇〇 " 角筆アリ

五〇一 " 角筆アリ  
「二徳院什物」墨書アリ

五〇二 " 角筆アリ

五〇三 " 角筆アリ

五〇四 " 角筆アリ

五〇五 " 角筆アリ

五〇六 補写

五〇七 " 古表紙卷首卷末ノミ

五〇八 " 角筆アリ

五〇九 " 角筆アリ

五一〇(欠卷)

五一一 宋版 角筆アリ  
「二徳院什物」墨書アリ

卷五二二 宋版

五二三 " 角筆アリ

五二四 " 角筆アリ

五二五 " 角筆アリ

五二六 " 角筆アリ

五二七 " 角筆アリ

五二八 " 角筆アリ

五二九 " 角筆アリ

五三〇 " 角筆アリ

五三一 " 角筆アリ

五三二 " 角筆アリ

五三三 " 角筆アリ

五三四 " 角筆アリ

五三五 " 角筆アリ

五三六 " 角筆アリ

裏表紙欠  
「二徳院什物」墨書アリ

刊記アリ

享保十七年  
奥書アリ

「二徳院什物」墨書アリ

大般若経に書入れられた鎌倉時代の角筆文字等について

卷五三七

宋版

角筆アリ

五三八

〃

角筆アリ

五三九

〃

角筆アリ

五四〇

〃

裏表紙欠

五四一

〃

角筆アリ 江戸補写アリ

五四二

〃

角筆アリ

五四三

〃

角筆アリ

五四四(欠卷)

〃

角筆アリ

五四五

宋版

角筆アリ

五四六

〃

角筆アリ

五四七

〃

角筆アリ

五四八

〃

角筆アリ

五四九

〃

角筆アリ

五五〇

〃

角筆アリ

五五一

和版

角筆アリ

五五二

和版

角筆アリ

五五三

宋版

角筆アリ

五五四

〃

角筆アリ

五五五

〃

角筆アリ

五五六

〃

角筆アリ

五五七

補写

角筆アリ

五五八

宋版

角筆アリ

五五九

〃

角筆アリ

五六〇

〃

角筆アリ

五六一

〃

角筆アリ

「二徳院什物」墨書アリ

卷五六二

宋版

角筆アリ

五六三

〃

角筆アリ

五六四

〃

角筆アリ

五六五

〃

角筆アリ

五六六

〃

角筆アリ

五六七

〃

角筆アリ

五六八

〃

角筆アリ

五六九

〃

角筆アリ

五七〇

〃

角筆アリ

五七一

〃

角筆アリ

五七二

〃

角筆アリ

五七三

〃

角筆アリ

五七四

〃

角筆アリ

五七五

〃

角筆アリ

五七六

〃

角筆アリ

五七七

〃

角筆アリ

五七八(欠卷)

宋版

角筆アリ

五七九

〃

角筆アリ

五八〇

〃

角筆アリ

五八一

〃

角筆アリ

五八二

〃

角筆アリ

五八三

〃

角筆アリ

五八四

〃

角筆アリ

五八五

〃

角筆アリ

五八六

〃

角筆アリ

裏表紙欠

「二徳院什物」墨書アリ

裏表紙欠

「二徳院什物」墨書アリ

五八七	宋版	角筆アリ
五八八	"	"
五八九(欠卷)	"	"
五九〇	宋版	刊記アリ 角筆アリ 卷首欠
五九一	"	角筆アリ 「二徳院什物」墨書アリ
五九二	"	角筆アリ
五九三	"	"
五九四	"	角筆アリ
五九五	"	"
五九六	"	角筆アリ
五九七	"	角筆アリ
五九八	"	角筆アリ
五九九	"	刊記アリ 角筆アリ
六〇〇	"	角筆アリ

○巻次未詳本文(何レモ補写)約四帖分アリ  
 ○巻次未詳の表紙ノミ四点アリ

大般若經に書入れられた鎌倉時代の角筆文字等について